

催せり、是をコサと云なりとぞ、略○中

或は蝦夷人は能霧を吐て身を陰すの術有、又は木の皮のいかにも厚きを卷て、簧と覺しき所に
 小さき竹あり、只空然たるのみ、水に浸して吹ば、只竹を打抜て、吹音の如し、是を胡障コサといふ、胡障
 は則胡筋也、笛の聲に山氣立登て、月曇るともいへり、是か地の籟なり、

〔年中行事大成三上〕四月二十八日

此月より北海浪靜なり、故に南部津輕の商人、蝦夷松前に渡つて交易し、九月を限て歸國す、是を
 松前渡といふ、

〔北海隨筆中〕蝦夷地圖の事

常憲院殿綱吉○徳川 御代初に、松前領主へ御尋有て、蝦夷の地理差上られ、狩野祐甫に命せられ、寫し

取て上りたるといへり、又水戸黃門光圀卿、蝦夷地の周廻御記の爲め、大船を仕立、松前へ遣され、
 蝦夷へ乗込けるに、順風稀にして日數懸り、西蝦夷マシケといふ所まで渡りけるに、ほどなく秋
 の末になりて、海上あらく渡りがたきゆへ、ソウヤまでも渡らずして歸りしとなり、殘念の事な
 り、

〔休明光記凡例〕一都て蝦夷地へ立る碑類に、漢文を用ひざるは、林大學頭乘衡齊○述が曰、今度彼地
 の擧は、新に本邦より處置せしめ給ふ所なれば、和文こそあらまほしけれとなり、故に皆和文を
 以て記す、

〔蝦夷草紙附五〕異國船舶漂著の事

一カムサスカといふ國は、ヲロシヤ國の地續にて、東方の大端也、然といへども、元來日本國の蝦
 夷地也、爰にヲロシヤ國の曆元一千六百四十三年に至りて、彼國の土人にコウフルといふ者、こ
 の地に至りて、はじめに見聞たる所也、日本天明丙午の年○六に及て、一千百四十七年になる、其